

樺太

望郷！ 北緯五〇度

北海道 高山文治

はじめに

「故郷は遠くにありて想うもの、そして悲しく歌うもの」とは、今更言うまでもなく室生犀星の有名な詩の一節である。この詩を思い出すたびに、私の胸中にはほろ苦い思いが込み上げてくる。

私は、今では異国になってしまった樺太（現在のサハリン）の大泊（コルサコフ）という港町で、昭和七（一九三二）年十一月に生まれた。しかし、今では大泊町の詳しい様子は、既に私の記憶からは薄れ去って

しまったが、それでもおぼろ気ながらに、そこが北海道の函館と小樽をミックスしたような雰囲気のある町であったことは、ほのかに覚えている。ここでは、小学校一年生の初夏のころまで比較的平穏な日々を過ごしていた。

父は、大泊にあった王子製紙の工場で働いていたが、昭和十四年の夏に、新しく開発された西柵丹村の「三井西柵丹石炭鉱業所」に職場を変えたので、一家をあげてそちらに移り住むことになった。西柵丹村は、北緯五〇度線上にあるソ連との国境から三十数キロメートルぐらい南に下った所にあり、海に近い寒村であった。そのような事情から大泊を離れたので、幼年期までの思い出しか残っていないが、それでも四季折々の自然との触れ合いを思い出すと、望郷の念とい

う言葉をしみじみと感じるような感情が沸き上がって
くる。

私が、樺太との思い出に浸るときは、必ずと言って
いくうちに、食べ物と犬のことが頭に浮かんでく
る。なぜかといえ、その答えは明白である。すなわ
ち、その時代は第二次世界大戦の真っ最中で、私のよ
うに昭和一桁生まれの者にとっては、いや応なしに食
べ物の欠乏を体験していたので、五十数年がたった今
でも食べ物に対する執着心が強いのであろう。諺に、
「食い物の恨みは恐ろしい」とあるが、これはまっ
くその通りである。犬は、樺太での日常生活の必要
上、どこの家でも多い少ないは別にして飼っていた
が、私の付き合った犬は五匹ほどであった。どの犬
も、「ジロ」という呼び名だった。それぞれ個性とい
うか犬性というか、性質の異なる犬だったが、その犬
に命を助けられたこともあった。

昭和六十三年の暮れまでは、当時のことは鮮明に記
憶に残っていたが、脳疾患で倒れてからは、大部分の
ことがぶつとりと切れてしまったので、思い出そうと

すればするほど焦りが出てきて、自分自身が惨めに
なってくる。だがこのままでは、あの戦争によって受
けた悲惨な苦労を自分一人の中にしまい込んでしま
うことになり、さらに、樺太という所の様子も、永久に
現在の日本人には伝わらなくなるのが非常に残念に
思われ、「忘れぬうちに」と思って、苦心惨たんして
記憶を呼び戻しながら、この記録を書くことにした。

西柵丹村での生活

父が大泊の製紙工場での平穩な仕事から、なぜ北に
離れ、しかも今までと異なる仕事の「西柵丹石炭鉱業
所」に移ったかの理由は、両親から直接聞くことがな
かったので私の推測の話だが、父はもともと北海道の
積丹半島の出身であったので、西柵丹という発音が、
自分の生まれ故郷と似ているのに郷愁を感じて惹かれ
たことと、当時は石炭開発が国策として重要視され、
そこで働く人々は「黒ダイヤの戦士」とか「石炭戦
士」とか言われてもてはやされていたし、石炭産業の
景気も非常に良かったので、当然製紙工場よりも待遇
が良かったからであると思う。それに、父は電気関

係の技術を持っていたので、転職するにも有利だったからであろう。いずれにせよ、我が一家六人は喜び勇んで西柵丹に移った。当時の樺太では、通称「ジャコシカ」と言って、放浪性のある一攫千金を狙った人々の多い社会だったので、待遇の良いところ、良い職場へと渡り歩く人が多かったが、父は既に一家六人の家庭を抱えている家長でもあり、そんなに浮わつた気持ちからではなく、一家の幸福と安穩を考えての転職であつたのだろう。

住宅は、海岸から数キロメートル離れた小高い所に、集団的に建てられた炭鉱住宅だったが、まだ完全にはでき上がっていないくて、部屋の障子にはまだ紙も張られてなく、屋内配線も完全ではないような未完の住宅だつた。父は電気技術者だつたので、すぐに配線工事を行い、私たちの入った一棟はいち早く電灯がついて入居者に喜ばれた。

住宅の周辺も、つい先ごろまでは森林地帯だつたことがありありと分かるように、掘り起こした木の根があちらこちらに山積みになされていた。その間に愛くる

しいシマリスが住み着いていて、私たちを見ては飛び回っていた。このシマリスは、漢方の薬の原料として珍重されていた。生きているのをそのまま黒焼きにしたのは神経痛の妙薬と言われている、一匹三十銭、死んだものでも五銭で売買されていた。これを狙って買ってくる人もいた。シマリスには面白い習性があつて、釣糸を輪状にしたものを、リスの顔の前に近づけても、きよんとした顔つきで動かないので、釣竿の先にこの輪状にした釣糸で釣ると、面白いように取れた。一日に二十数匹も釣れた人がいたということだつたが、単純に計算しても、当時の金で十円近くになつた。正月にもらうお年玉でも、一円ももらうと「半分でもいいよ」と母に言われて、五十銭は没収されたような時代だつたので、十円という収穫は大変なことだつた。

「西柵丹石炭鉱業所」は三井の資本であつたが、現在私の住んでいる西芦別町にも「三井芦別炭鉱部」があり、しかも開鉱は同じ昭和十四年で、引き揚げてきて芦別に落ち着いてから閉山を迎えた。私の人生は、

この三井系の炭鉱でほとんど過ごしたが、これも何かの因縁なのかもしれない。

父が、家族と共に西柵丹で平穏な生活をしていた期間は短かったが、仕事といい日常生活といい、最も充実した歳月ではなかったろうか。炭鉱の電気屋（そう呼ばれていたらしい）で、しかも先山だったので、普段から我が家には数人の若者が出入りしていた。開鉱したばかりなので、技術者は大変に優遇されていたが、とりわけ電気関係者は特殊な存在であって、八人ほどの班員を指揮していて、坑内、坑外で結構忙しい毎日であつたらしい。

樺太には西柵以外にも、川上炭鉱という大きな炭鉱所があつたが、折からの軍需景気と日本での唯一のエネルギー産業であるということで、いくら掘っても掘っても足りないという時代背景もあって、景気は大変なものであつた。西柵丹村のように林業と漁業が半々の寒村でも、この炭鉱の恩恵で、最盛期には人口は一万人以上となり、学校、医療機関、娯楽施設などが次から次と整備されて、以前四千人そこそこの人口

の時代の村とは比較できないくらいに発展していた。町中にはカフェやいかわしい料理屋などが繁盛して、夜ともなると華やかなきょう声で埋まっていた。

昭和十六年十二月八日、日本は米国をはじめとする世界の主要国を相手に戦端を開き、あの第二次世界大戦に突入した。ソ連は「日ソ不可侵条約」が締結されていたので、この時点では同盟国としてのよしみで友好関係にあつた。それからわずか二年あまりが過ぎた昭和十八年の末になると、芳しくない戦況の数々が毎日のように重苦しい空気と共に、この西柵丹にも伝わってきた。

昭和十九年の秋、お盆が過ぎたばかりだというのに、ここ西柵丹ではもう霜が降りていたが、父はそんなころに多くの同僚とともに、九州の同じ三井系の炭鉱に徴用されて、家族を西柵丹に残したまま九州に行ってしまった。それからの我が家の生計は、送られてくる父の給料が唯一の収入となつた。だがまだ定期的に送られてくる間は、格別に不足はなく平穏な生活が続いていた。

九州からは、時々使りがあつたが、北海道生まれで樺太生活の長い父には、真夏の九州でしかも坑内労働の暑さには格別に過酷なものがあつたらしく、母あての便りには随所にその苦しいことが書いてあつた。特に食べ物には、相当に苦しんでいたようだった。味噌汁は塩味で、その中の具はカボチャの茎か、サツマイモのツルだけで、随分ひどいらしかった。母は、父の好物だったゴボウ味噌を作つて、オートミールの空き缶に詰めて送っていたが、折り返しに送ってくる手紙には、「うまくつて！ うまくつて！ あんましようまくつて、大事に食べている」と、道南の漁師町で生まれたまんまの方言丸出しで書いてあつたそうだ。

父も大変だつたらうが、残つた私たち家族の食生活もだんだんと悪くなつてきた。収入は父の給料だけで、当時小学校六年生であつた私を頭に、食べ盛りの五人の子供のいる我が家では、給料だけで毎日の食事を賄わなければならず、母は苦勞をしていた。主食の量を増やすためには、どこの家でも大豆、イモ、フキ、昆布など主食代用になるあらゆるものを刻み込んで

だ。おかゆが主であつた我が家の雑物混入率は、他の家よりも高かつたのではなかつたかと思う。学校に持つていく弁当箱の蓋を取ると、混ぜ物が我が物顔で箱の真ん中に収まつていて、米粒は申し訳なさそうに四隅に小さく固まつていた。

戦局は、我々の知らぬ間に坂道を転がり下りるよう加速速度をつけながらどんどんと暗い方向に進んでいたようだったが、西柵丹の在任者は、まったく蚊帳の外に置かれていた。

終戦、そしてその後の生活

昭和二十年八月十五日、終戦。第二次世界大戦は日本の全面降伏で終わった。敵密に言えば、ポツダム宣言を受諾する以前に、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して対日宣戦布告をし、八月九日には満ソ国境から怒濤の勢いをもって侵攻していた。そのこと自体は歴史の場で論ぜられることであり、その是非は後世の識者に任せることとするが、いずれにせよソ連軍の侵攻は突然のことであつた。特に樺太は、終戦後の八月十八日以降になつて悲惨な目に遭わされたのであ

る。樺太を占領するというスターリンの野望で、十八日には樺太の海岸沿いの各地点から一斉に上陸をして、場所によっては既に武装を解除していた日本軍と熾烈な戦闘の末に、多くの日本軍が犠牲を払ったことは、戦後に多くの関係者が語っていることでも明らかである。

私たち炭鉱住宅に住んでいた者は、なけなしの身用品を入れた荷物を背にして右往左往した。あるときは、炭鉱の輪車路に板やむしろを敷いて、その上でごろ寝をしていた。輪車路での避難生活が数日続いたが、そこで鉱業所の手配で炊き出しが行われて、赤ん坊の頭ほど大きなにぎり飯が配られたが、混じり物のない純米のおにぎりだった。ここ数カ月の食事といえば、大豆、イモ、昆布など米以外が主力だったので、白米だけのにぎり飯は本当においしかった。「これなら避難生活も、もっと続いてもいいね」と言ったら、母から目から火が飛び出るほど叱られたことを思い出さず。また、暗い坑内を梯子伝いに必死になって逃避を繰り返して逃げ回っていたが、結局は再び自宅に戻る

ことになった。

もうそのころには、炭鉱住宅街にはソ連軍が来ていた。私と同じ年輩ぐらいと思われるような少年兵に、マンドリン銃を胸元に突き付けられて、両手を上げさせられたこともあった。満州に侵攻したソ連軍の兵隊は非常に粗野で、暴行、強奪、強姦など、ひどいことを平気で行っていたそうで、ソ連兵の多くは囚人部隊であるとの風評であったが、西柵丹に来たソ連兵は、比較的質が良かった。それでも後で知ったことだが、同じ樺太でも場所によっては目を覆いたくなるような、流血の惨事が起きていたそうだった。毎年刊行される『平和の礎』を読むと、目をそむけたくなるような体験が書かれているが、幸いにも私はそのような悲惨な場面には遭っていないかった。出来事といえば、ソ連軍の飛行機により、鉱業所幹部の家が爆撃されて根こそぎ破壊されたが、その跡に缶詰が大量に散乱していて、朝鮮人の集団が暴徒のようになって奪い合っていたことぐらいだった。

炭鉱住宅街にいるソ連兵の髪の色と、目の色と、そ

してそのいかつい体付きによく見慣れたころに、今度は移住民のソ連人がやってきた。服装から持ち物に至るまで、それこそ文字どおりの着た切り雀の集団だったが、彼らは短時間の間に、たくましくも、この土地の生活に融け込んでいった。

敗戦を境にして、被占領民の立場になった私たちは、極端に変化した窮乏生活に追いやられた。「働かざる者、食うべからず」という社会主義国のスローガンが、何ら咀嚼そしゃくされることも無く、ストリートに覆いかぶさってきた。父のいない我が家は、生活の底辺にさまようことになってしまった。

北国の人たちは、例外なく新鮮な緑に飢えていた。西柵丹で採れるアイヌネギは、小指ほどもある太いネギだが、味は抜群においしかった。だが、それは臭みを気にしなければであり、その臭みは強烈であった。採取したときは、ネギ特有の臭みであってそれ自体はそんなに苦にならないが、口に入れたら最後その人の体臭とミックスされて、強烈な悪臭に変化してしまうのである。その臭いほどこまでもついてきて、便所に

でも入ろうものならば、胸に迫ってくるものがあり、吐き気を催すぐらいの悪臭をまき散らすのだった。二年ぐらいソ連人と交わっての生活を余儀なくされて過ごしたが、彼らはアイヌネギを好んで食べていた。それも生の物に塩をかけて、ばりばりいわせながら食べるので、私たちはあっ気にとられて、ただ呆然として見ていた。彼らは私たちに向かって、「これはうまい、うまい！ お前も食べないか！」というゼスチャーを見せて見せた。我が家の生計を助けるためのアイヌネギの収穫は、貴重な現金収入源になっていた。彼らは、持って行くとすぐに買ってくれた。親しくなった移住民一家の食事は、酸っぱい黒パンに塩鱈、それにアイヌネギだったと記憶している。

移住ソ連人が、大挙して樺太の各地にやって来てから数カ月はまたたく間にたってしまったが、それに応じるように、彼らは戦勝国民という優越感を露骨に表しはじめてきた。まず、漁業施設を次々と接収していった。そして、その施設を利用して、当時は無尽蔵と言われていた、鱈タラを漁獲しては加工していた。加工

といっても、彼らは特別な加工技術を持っているわけではなく、鱈の頭を落とし、はらわたを取って背開きにして、コンクリート製の大きな容器に並べて入れ、岩塩をまぶしてその上から足で踏みつけるといふ、原始的な塩漬け加工であった。彼らは、そのしょっぱい身をむしって、酸味のある黒バンとともに食べるのだが、それが彼らの日常の食事で極めて質素ではあった。

父と一緒に九州の炭鉱に徴用されていた父親を持つ友人がいたが、その友人からある日、「加工工場で鱈の頭や、はらわたがそのまま捨てられているそうだから、拾いに行かないか」と、私を誘いに来てくれた。もうそのころになると、保有していた食糧も底を突き始めていた。金やコネのある人々とはもかく、一般の残留者には満足するほどの食べ物を得る手段はなかったのだ、これは良い話だとばかりにすぐに賛成した。母は随分と心配したが、食べ物が入るといふ魅力には勝てずに黙認してくれた。当時のソ連という国は、すべて建て前の優先する国柄で、社会主義思想

を振りかざして共産主義の有り難味を強調していたが、一般民衆の声は取り上げられていなかった。それらは平気で無視していて、「スターリン万歳」「スターリン万歳」で答えていた。そんな時代だったので、現地住民や、同じソ連人である移住民、ましてや日本人残留者に対しての食糧供給などということには、あまり意を用いていなかった。一応は配給制度が敷かれてはいたが、遅配、欠配などは日常茶飯事のことであり、改善しようという考えはなかった。そんな食糧事情の最中だったので、この話は大変に助かる話で、すぐにその日に行動することになった。

鳥の鳴き声をうわの空で聞きながら寒気に身を震わせて、工場の外扉にうづくまっていた。寒さを一層厳しく感じさせる鳴き声の元凶は鷓鴣カキキ（樺太では、ゴメと呼んでいた）である。波打ち際に群れていて、波で打ち上げられる獲物をねらって、けたたましい鳴き声を出すのだが、それはそれはすさまじい限りであった。そんな所でしばらくうづくまっていたが、難儀だった。そのうちに工場の扉が開いて、中年のソ連人

女性が、通称「ネコ」と言っていた一輪車を押し出してきた。彼女は、大柄でたくましい感じのするソ連人女性特有の体格をしていた。押し出してきた「ネコ」は、まるで彼女のおもちやのような感じだった。私たち二人の存在にすぐに気付いたが驚く様子もなく、ちょっとウインクをして、私たちの目の前で「ネコ」をひっくり返して戻って行った。これからは、今度は、鷗や、鳥との駆け引きであった。すぐに群らがつて襲ってきた。それらを蹴飛ばしながら、漁師がよく使うマキリという小型の刃物で鱈の余分な所を切り捨てて、用意してきた一斗缶に放り込んだ。一番の狙いは、言うまでもなく頭と「アブラ」と言っている肝臓と胃袋だった。積丹半島の漁師の家で育った父は、以前から、「三平汁に、アブラが入ってなきや食えたもんじゃない。入っていると、いい味はまるで違う」と言っていたことが耳に残っていた。胃袋に、マキリの切っ鋒を入れてすうーと裂くと、そこからは未消化の魚介類が出てくる。よく「たらふく食べる」という言葉があるが、それは食欲な鱈の習性を言い表し

ているとのことだ。一斗缶は、数匹分ですぐにいっぱいになってしまった。それを担いで意気揚々として、それぞれの家に戻った。心配していた家族も、皆喜んで迎えてくれた。それから我が家で、自給自足のジャガイモ、ダイコン、そしてニンジンなどの野菜を加えて三平汁を作ったが、当時としては豪華な三平汁の食事となった。加工場での作業は、何事によらずすべてに大雑把なソ連人らしく、骨にはたっぷり身がついたままだったし、アブラもそのままを手をつけていないので、おいしかった。母は、早速にアブラを空煎りして魚油を作り、いため物や揚げ物用の油として保存した。これは魚油特有の臭みを持った臭いがしていたが、飢えていたころの私たちにとっては少しも苦にならなかった。育ち盛りの子供の多い我が家の栄養補給に、母はそれなりの努力をしていた。後年になって知ったことだが、大泊にいた頃に、肝油を注射器で口中に入れられたことを覚えていたが、その肝油は主として鱈の肝臓から抽出されていたとのことだった。となれば、私たちが食べていたアブラは、まさに肝油

を食べていたことになるのだった。アブラを食べて飢えをしのいでいた私たちは、それなりの栄養を取っていたことになり、そのころの劣悪な食糧事情にもかかわらず、病気もせず元気で帰国したことは、感謝しなければならぬことであると思った。その後も数度拾いに行ったが、だんだんと食糧事情が改善されてきたことと、ソ連兵による監視が厳しくなってきたことにより、行かなくなってしまった。心無い人が、加工場の銃を壊して塩鱈を盗んだということがあって、警備が厳しくなったとも言われていた。

昭和二十三年の夏になって、ここ西柵丹村に残留していた日本人にも、引揚げの話が伝わってきた。残留者はそれぞれ希望を持ち出して、心の準備をしていた。そのうちにその話はだんだんと具体的になり、ついに引揚者リストに名前が載るようになった。父からの消息は途絶えたままだったが、九州にいるのだから当然無事であろうと安心はしていたが、九州にそのままいるのか、積丹の実家に帰っているのか、それは不明のままだった。父と無事に会えることを唯一の目標

にして、思い出の多い西柵丹村を発って、ソ連側の指示に従って、用意された貨物船に乗った。

直接に、日本に向かうのかと期待していたが、途中樺太海岸の各港々に寄って、それぞれ引揚者を収容しながら航海して、一応真岡港に入り、そこで全員降ろされてしまった。話を聞くと、樺太内はソ連側によって引揚者を収容し、樺太から日本本土までは、日本側の用意した引揚船によるとのことだった。そのため、日本から迎える引揚船が入港するまでの間、真岡市内の収容所に収容されることとなった。

収容所は、ソ連兵によって管理されていて、引揚者の中から選ばれた運営委員によって自主管理的な日常生活が営まれることとなった。収容所は以前学校であったように、教室のような部屋に四十ほどの二段ベットが並び、家族単位に割り当てられて、手足を伸ばす自由は与えられた。食事は三食とも支給されたが、中身は粟を油濃く煮てそれに水分を加えたカーシャという一種のおかゆに、塩鱈などが少々のもつていた。私は部屋の掃除や、食事当番などを分担してい

た。ただ、流言飛語と盗難、強奪が横行していた。皆ソ連兵の仕業であった。特に盗難、強奪などは、監視のソ連兵も加わって、組織的、計画的に行われていたので防ぎようがなかった。

数十日の収容所生活を終えて、やっと日本から迎えるに來た引揚船に乗船し、函館港に入港して日本の土を初めて踏んだ。DDTの白い粉を、頭といわず背中といわず体中にまかれて上陸した。

父は積丹の実家に戻っているだろうと思っていたが、人伝に、終戦後すぐに同じ三井系の三井芦別鉱業所に移ったことを聞いたので、函館から父のいる芦別を目指した。

列車内は闇屋風の人たちが座席を独占していて、薄汚れた姿の引揚者たちは車内の隅の方に小さくなって座った。しばらくすると列車の揺れに疲れが出て、まどろんでしまった。そのうちに人声に目を覚ますと、そばに座っていた闇屋のような男が、妹にサツマイモのふかしたのを握らせてくれた。母は、幾度も幾度も頭を下げていた。「夫が、樺太から九州の炭鉱に徴用

されて私たち家族を置いて行ってしまい、終戦になって芦別の炭鉱に移って働いているらしいので、そこに訪ねて行くところです」と言っている母の話に同情したのか、その男は大きなリュックサックの中から、身欠き鯨とスルメの束を取り出して、母の手に渡していた。「おれも特攻隊でね、生き残ってね」と、ぼつりとひとこと言っていた。精悍な顔をしていたその男の目は、涙でうるんでいたようだった。このことは今でもはっきりと覚えていいる。私は、スルメの足を口に入れたが、飲み込むのが惜しくて時間を掛けてしゃぶっていた。

芦別にやっとの思いでたどり着いた。父は徴用された仲間と一緒に芦別に来て、三井芦別鉱業所で働きたがら、私たち家族の引き揚げて来るのを一日千秋の想いで待っていた。だが、父と感激の再会を果たしても生活の変化はなかった。炭鉱での石炭景気も、直接には恩恵をこうむらなかった。それは、父が坑内での落盤事故で腰を痛めていて、十分な働きができずに、わずかな傷害手当に頼っていたからだ。日本に帰れ

ばまた学校に行けるという夢は、幻となって消えてしまった。私は、父の顔を見て安心したが、その日から職を求めて歩き回った。そして鉱業所の世話で、ここ三井芦別鉱業所で働くこととなった。

それから五十数年。父は五十四歳でこの世を去った。母は八十歳で見送ったが、多少でも長生きしてくれたことがせめてもの慰めである。引き揚げるとき自分の背よりも大きい荷物を背負っていた後ろ姿が、私の脳裏からいつまでもいつまでも消え去らない。

日本も大きく変貌して、世界の主要国と肩を並べる経済大国になったが、戦争を知らない世代が全日本人の七五%を超えるという現実の中で、戦火の中を逃げ回ったことも、食べ物が無くてひもじい思いをして極端な窮乏生活をしてきたことも、遠い記憶の彼方に薄れ去ろうとしている。今は、口にする食べ物もあまりにも豊富になった。世の人々は、「飽食の時代」とも言っている。そんな中で、私も成長し一端の社会人として、何一つ不自由の無い生活をしているが、それでも昭和一桁生まれという、考えてみれば中途半端な時

代に育ったことが、一生にかけて影響していて、あの苦難の時代に育った後遺症のようなものが、知らず知らずのうちに出てくる。妻が、「あんた！ いつもがっかりしているみたい」とよく言うが、「なるほどな！」と思うことである。箸の先をかじるという癖も、あの戦中、戦後の心の傷跡かも知れない。少年時代に満たされなかった飢餓感が、今に至るも残っているのだろう。

そんなときでも、あの北緯五〇度線のことには忘れようにも忘れられないことである。あそこでのいろいろなことを、今つづっておかなければ、再び日本人は知ることができないだろうと思うと、このままではいけないと常に考えていた。そこで、現在の人々、また後世の人々に知ってもらいたいことを少し書いてみた。

樺太の冬

樺太の冬を一口で表現するならば、「すさまじい」の一言に尽きるだろう。厳寒期には氷点下三十数度を下回る。沿海州から吹き寄せる風は、想像を絶するような風圧となり、雪を捲き込み大暴れに山野を襲う。

それは実際に体験した者でないとは分らないが、息が詰まるという激しさである。特に恐ろしいのは、方向感覚を狂わせることであった。家からわずか数十メートルの所で遭難死する人も、珍しいことではなかった。猛烈な吹雪の朝を迎えた日などは、登校時間が近づくとつれて、小学生の私たちはある種の期待感を持ち始める。そのうちに家の中の電灯が数度点滅すると、あとは窓からの雪明りだけになる。そうなれば臨時休校ということになり、歓声をあげる。そんなときでも父は、「やれ、やれ」とほやきながら、完全防備の服装で故障当番所に行く。電気屋の父は、坑内、坑外を問わず、電気については町全体の面倒もみていたからである。私たちは休校という大義名分があるので、吹雪を物ともせずに戸外に飛び出して、息を詰まらせながら遊んだものだ。

オーロラ

樺太の二月は比較的に好天が続くが、それだけに寒気はいよいよ厳しくなり、鼻がもげてしまいそうになる。夜、満天の星空で空気が張りつめているような感

じだった。共同浴場からの帰り道、ふと夜空を仰ぐと、光り輝く物体が見えた。見慣れている星とは異なり、中空に黄色や紫色などが帯状になって、くねくねとして怪しい輝きを放っていた。その神秘的な怪しい輝きは数分で消えてしまった。怖くなった私は、一目散に走って家に戻り母にその様子を話すと、そんなことは珍しくないというような表情で、「オーロラかもしれないよ」と言った。オーロラ？ 私の見たのが本当にオーロラであるならば、極北の地で起こる天然現象が、北緯五〇度でも見えるということになる。

海あけ

海あけは、海に多少でも関心のある人は知っているだろうが、待ちに待っていた春の訪れである。住宅街から数キロメートルも行くと、もう海岸だった。その中間の所に学校があったが、時化しげのときの海鳴りは、授業中の教室まで不気味なうなり声をあげて伝わってくる。この時化が数日続くと静かになる。波の収まるのを待って、海岸に飛び出す。そこには海藻が波打ち際から十数メートルも押し上げられている。その海藻

の山を、厚い板の先端に五寸釘を打ちつけた道具で崩すと、いろいろな物が出てくる。北奇貝や、ツブと言っていたエゾボラ貝などがたくさん取れた。また、瀕死の状態になった二十センチメートル以上もある大きなエビや、ロスケガモも見付かった。腹部に吸盤のあるゴッコ（布袋魚）も拾った。幅一メートル、長さ十メートルもある昆布も容易に取れたが、これらは戦争末期の食糧難のときに大変に役立ったものである。

シシャモ

春になると波の音も和らいでくる。日中は暖かいが、日が沈むと急に肌がぞくつとして寒さを感じる。この時期になると、シシャモが群れをなして産卵のために海辺に寄って来る。シシャモは北国に生活する者にとつては、自然が恵んでくれる贈物である。素干し、焼き干し、煮干しなど、いろいろな方法で処理して貯えることができる。そして一年中を通しての蛋白質となり、我々の生活では欠かすことのできない食料品であった。「たも」というすくい網で取るのだが、場所によって当たり外れがあり、取れるときは一斗缶

で十缶以上もとれるし、駄目なときは全く取れないこともあった。一夜明けると、町中がシシャモの臭いで埋まってしまいうくらいだった。昆布などと同じように、我々が引き揚げるまで病気もせずに過ごすことができたのは、シシャモの助けと言っても過言ではなく、今でもシシャモを見ると感謝している。

山菜

シシャモが終わると山菜の盛りとなる季節がやって来る。冬ごもりのヒグマが冬眠の穴から出て、最初食べるのが黄色い可憐な花を咲かせているヤチブキである。これをむさほり食べることで、冬ごもりの宿便を排出するというアイヌの古老の話を聞いた。また、山菜といえばゴゴミも忘れることはできない。小指の太さで成長も早く、頭を持ち上げて二、三日ぐらいすると食べごろとなる。ワラビや、ゼンマイと異なつて苦みが無く、栄養源のひとつである。そのほかに、フキとか、クロユリ、ハマナスの実などが豊富で、よく食べたことは忘れられない。

果物の少ない樺太では、貴重品扱いをしていたもの

に、フレップ（学名はコケモモ）がある。小豆ぐらいの大きさの実で酸味の強い果実だったが、その実は赤色のものと、紫紺色のものと二種類があった。ほとんどの家ではそれを醸造して、果実酒として貯蔵していた。ヒグマもこれを好物にしていたので、人間とクマとの早い者勝ちの取り合いとなり、よくクマに遭遇したことだった。

犬

樺太では犬を忘れた生活はできない。家々では犬を家族の一員としてかわいがり、そしていろいろと犬に助けられていた。

私の左手甲に、三センチメートルほどの傷跡がある。最近はまだ目立たないが、若いころはかなりはっきりと浮き上がっていた。母の話では、大泊にいた二歳のときに犬にかまれたとのことであった。

当時、父は王子製紙工場の揚水場に勤務していたそうだが、そこで飼っていた「ジロ」と呼ぶ白い毛の大きな犬が、父に対しては絶対に従順な犬だった。元々は、揚水場の奥の造材飯場で飼われていたが、そこで

働いている木こりたちが面白半分にいじめたりしているうちに、だんだんと凶暴になり、手をつけられなくなって揚水場に連れて来たらしい。最初のころは父に對してもきばをむいていたが、慣れるに従って父の与えるえさしか口にしなくなった。父は、揚水場で飼っていたのでは十分にえさも与えられないので、我が家に連れて来たのだった。私が、かまれた原因はよく分からないが、おそらく頭でも撫でようとして手を出したからであろう。相当にひどく咬まれたそうだ。それから両親は、このジロを飼う、飼わないで大変にもめたらしいが、結局は父の意見が通って飼い犬となった。だが、それから半年後に、私はこのジロのおかげで命拾いをしたのだから、妙な因縁であった。

冬になったある日、私は急性肺炎になった。数日熱が続いたが、急に高熱をだした。その夜は樺太特有のすさまじい吹雪となり、停電はするし頼みの電話も不通になり、事務所に行くにも豪雪の山越えは難しいという悪条件が重なっていた。意を決した父は、急造のそりに母と私を押し込み、ジロに引かせて、六キロ

メートル以上離れている町に向かった。途中、吹きだまりに何度か突っ込み転倒したりしたが、やっとの思いで病院に着いた。私はもう仮死状態になっていた。医者からも「命の保障はできない」と、宣言されたとのことだった。もう少しで、父の造ったそりが棺桶となるところだった。ジロは命の恩人となったが、それが初代のジロだった。

小学校一年生の夏、西柵丹村に移ってから、父は友人から生後二カ月の小犬をもらった。樺太犬とシェパード犬との混血だという小犬だったが、本当にかわいくて一家のマスケット的存在だった。成長するに従って、体型から気質まで双方の血統の特徴を現してきた。どんな相手にも一歩も引かないという闘志と、飼い主に対する忠誠心を持っていた。冬になっても平気でそりを引っぱって、私たちを助けてくれた。後年、南極の昭和基地での樺太犬の生存が話題になったが、私は、さもありなんと同感したものだ。そのジロが、戦争の末期に徴用犬として国境の安別警備隊に連れて行かれた。その後、警備隊から「ジロは大変

に優秀な犬で、現在、先頭犬として頑張っている。近く西柵丹に行くので、そのときは連絡する」という使いがあつた。しばらくして、役場から「ジロが来ている」という知らせを受けたので駆け付けると、ジロは、いち早く私を見付けて、一緒にロープでつながれている犬を引きずりながら歩み寄って来た。一段とたくましくなつたジロを抱いて再会を喜んだが、私は涙が出て止まらなかつた。

終戦後、警備隊は犬を解き放つたが、犬は今まで寝食を共にしていた兵隊のそばを離れようとしなかつたとのことで、最後には兵隊は泣きながら毒殺、射殺したという話を、その後安別から逃れて来た人から聞いた。私は、その人にジロの生死を聞いたが、「分からない！ 逃げた犬もいると言っていたからなあ！」と、慰めるような口調で言ってくれた。私は、生きて西柵丹まで戻って来ることに望みを掛けて待っていたが、ついに再会できなかった。

結 び

樺太もかつて暮らした思い出の土地も、今ではすべ

て横文字で表され呼ばれているが、私にはいつまでも樺太であり、大泊であり、そして西柵丹なのである。そして更に、アブラであり、ヤチブキであり、コゴミなのである。更にそれを集約したものが、ジロの思い出につながってくる。私は、頑固にも昔の呼び名に固執する者であり、今後も意志を曲げるつもりはない。これは、樺太から引き揚げてきた人々の共通の思いであらう。

祖国への断章

東京都 近江 一男

一 私の生い立ち

私の家は近江家の絵本家で、昔、明治の中期に事情があつて近江の国滋賀県から、北海道は函館市の、現在函館空港のある赤川町に移住した。その別家は今も函館市内の桔梗町に、豪邸として保存されている。その後私の祖父は、一家を挙げて樺太（サハリン）に移

り、豊原郡の落合町に腰を据えた。昭和の初期に、父は北樺太に近い恵須取（ウゴレゴレスク）町にあつた、王子製紙恵須取工場の動力部門に勤務していた。

私は、昭和六（一九三一）年九月一三日、北海道の栗山町で生まれた。母は姉の家にお産のために身を寄せていて、そこで私を産んだのであつた。しばらくして、母と私は恵須取に戻り幼年期を過ごし、昭和十二年四月に恵須取第二尋常小学校に入学し、担任の宮川先生の訓育を受けて、六年間を平穩無事に過ごした。昭和十九年三月に、当時は国民学校となつていた恵須取第二国民学校を卒業し、樺太庁立恵須取中学校に入った。昭和二十年春までは落ち着いた中学生活で、一人息子として父母の寵愛を一身に受け、何不自由なく大事に育てられていて、私も何の不平不満もなく過ごしていた。

そして昭和二十年春、中学二年生になったときから、今までの平和で穏やかだった生活が一変してしまった。あの二度とあつてはならない悲劇が、そこから始まつたのである。